

「通信制高等学校関係者と県民文化部長との意見交換会」 概要

1 日時 令和4年8月25日(木) 16時～17時15分

2 場所 長野県庁西庁舎 112号会議室

3 出席者

【通信制高等学校】

長野俊英高等学校 校長 山岸 薫

つくば開成高等学校 校長 戸田 昇

飯田女子高等学校 校長 有馬 乃

信濃むつみ高等学校 校長 水野 尚哉

【長野県】

県民文化部長 山田 明子

県民文化部次長兼参事 池上 安雄

私学振興課長 丸山 俊樹

(同席) 高校教育課

4 意見交換テーマ

- 通信制高校への進学者増加・多様化する中での現状や課題（生徒指導や学習指導における苦労等）
- 高校卒業後の生徒の進路
- 通信制高校の魅力や生徒に対する期待

5 意見交換概要

- 自己紹介
- 部長挨拶
- 意見交換

(出席者)

本校は県内では他の学校に比べて、比較的早くスクールカウンセラーを2名常駐させ、養護教諭も2名配置して、困難を抱えながらも高校に入ったら、もう一度頑張っって自分の将来を開くんだという子どもたちを迎え入れて教育をしてきたが、残念ながら卒業までたどり着かない子どもたちが毎年一定数出ており、通信制における教育を保障するためにはそこで指導していただく先生方をしっかりと確保しなければいけない。

4月の入学式のことであるが、生徒たちの顔色が全く違う。何か解放されたような穏やかな顔でスタートできたので、そういう意味で今の子どもたちの抱えている全日制中心の学校体制になかなか適応できない人は、通信制はやっぱり大事な一つの選択肢なのかなということを痛感している。

これから先だが、今は、不登校生、発達障害の子どもたちも全日制を続かなかった子ど

もたちの受け皿ということでやっているが、この先、全日制高校と同類の中学生の選択肢の一つとして、時間だとか場所に拘束されない、学びながら本来の持っている優れた資質や能力を発揮できる、そういう子どもたちも迎え入れていきたいという理事長の考えのもと、今後学校運営を進めていきたいと考えている。

(出席者)

この数十年間で文部科学省の通信制高校に対する考え方がものすごく大きく変わってきた。

通信制高校は、勤労者のための学校という位置づけが発達障害を持つ子どもたちや不登校傾向の受け皿になってきていた。現在もその状態ではあるが、それ以外スポーツに専念したい、医学部に進みたい、あるいは芸能活動したい、そういった方たちも入ってきている。そのためものすごく学力差が大きい。

文部科学省は通信制教育に関しては個々の学力に応じた内容で、個別に指導することを大前提としており、私どもの学校の学習スタイルも完全に個別指導のスタイルをとっている。そうすると教員が足りない。募集しても来ない。そういったところが今後通信制教育を行うにあたって、教員不足というものが発生する可能性が高いと思う。

私どもの学校では「生きる力」を一番重要視している。学校では行事を積極的に実施(ボランティア活動、文化祭、部活動等)している。このような形で自己肯定感の欠如した子どもたちが自分たちもやればできるということを養わせたい。また主体的に考えて行動する力をつけるために、いろんな行事を企画させたり、それを実行させることによって養っている。

卒業後の進路についてだが、子どもたちが将来的に税金で養われる人間ではなくて、職業的社会人としてこの地域に貢献できる、そういう人材育成をしたいと考えている。1年生の時点で三者面談を年2回実施したり、体験学習として実際に大学、専門学校、一般企業に来ていただいたり、こちらから出向いたりしてキャリア教育の一環としての指導も行っている。就職も進学も決まらない生徒には若者サポートステーションとか社協と連携し、卒業後の状況を把握しながらその子らの自立をバックアップしているという状況。

最後に問題点だが、県で何年か前から県外からの通信制サポート校に行っている生徒に対し補助しているが、サポート校はあくまで「塾」。全日制の生徒が塾に通っているからといって補助はしないはず。特に今少子化が進んで、高校の公私比率とか考えてるわけで、どこの高校も本当に生徒数苦勞してる中で、県外の通信制高校に補助金を出すということに対してどうかと思う。

補助をするなら、「通信制高校に在籍する生活に困窮している生徒」という視点で部活費用や教材費などに使うための経費に対して行うべきではないか。

(出席者)

担任をしているときに、生徒の家に家庭訪問に行き、生徒が持っていたパンフレットを

みたら県外通信制高校が9、10月なのに「今から卒業できる」というものがあり、あまりにも無責任さを感じた。

通信制高校を設置した一番の目的は何かというと、本校を選んでくれた生徒、縁があった生徒を大切にということ。何とかこの子たちを救いたい、学校にいたいけれど単位が足らないという子と一緒に卒業できたらという考え。

狭域であり、安心して通わせてくれる地元の方も多し。生徒は基本的には地元の子どもたちが中心である。

最近是不登校と集団不適應とか学力不足というようなことでの入学生が多く、又、全日制から転科していく子たちも多い。特に最近では難病や精神疾患、帰国子女、外国籍の子どもたちも入ってきてるような状況である。本校はとにかく社会に戻すというようなこと、社会に繋げるといふようなことを一番の目標にしている。

校長、教頭以外の教員はベテランの教員を配置している。教員が力をつけなければ駄目だと思う。経験豊富な教員を配置しても、様々な子どもたちが増えてきていることに対応できない。

卒業した子どもたちは、大学に入学し、例えば看護師を目指したり、介護や保育士を目指して今頑張ってる子も多い。後は、地元専門学校の関係で地元企業と連携し、不登校の経験がある子を引き受け、それを理解の上で、企業に就職させてもらっている。

問題点というのは、やっぱり教員の力不足。教員をもっと欲しいところがあるが、経営的なこともあり難し。経常費の補助金をいただいているが、最近通信制の生徒が多くなってきており、額をもう少し増やしていただくと教員の数を増やしたり、いろいろな行事を行うことができる。できたらこの辺りを拡大していただくとますますいいのかなと思う。

多様性の時代と言われているが、私達はその原点ということで「生きる力」を持つことがとても必要だと思う。その子が自分の力で生きていけるといふようなことが一番である、1人で歩けるような人生を歩ませたいと思っている。

(出席者)

本校では当初から通信制というものがとてもいいシステムだと考えている。それはとても自由度が高く、学びたいときにいつでもどこでもやれること。何年も前からインターネットを用いて、うちの学校は学びを提供してきた。多様性を認め、どんな子でも学べるということの重要さというのがあると思っている。

通信制は、全日制の下にあるイメージがあり、うちの学校に来る生徒も全日制に行かれないからうちに来るといふ生徒も多い。ただ、最近では第1志望で選んでくれる方も増えている。あれができないこれができない、だから通信制ではなくて、これもできるあれもできる、だから通信制なんだと、むしろもっと前向きに選んでほしいし、それがあつ意味、後ろ向きに入ってきた子たちの力をつけさせ、この学校でいろいろなことできるよということ励ましながらやっているとあるところがある。

通信制の一番いいところは自由な時間がたくさんあると、スノーボードをやりたいとか、

勉強したいとか、いろんなことをやりたいということで入ってくる生徒も多くいるが、こちらでもそういったことをどんどんやるように勧めている。

かといってやはり通信制というのは大学とかもそうだが、すごく自立していないとできないシステムである。自分で計画を立てる、自分でアルバイトをやって、趣味もやって、いろんなことをやって学校もやるという、全部自分でスケジュールリングしていかなければならない。

これはすごく自立を促すシステムになっていて、それでもすごくいいことなんだけれども、やっぱり高校生には難しい。そこで、うちの学校では「ゼミ活動」として、福島に行って原発の問題を考えたり、沖縄に行って基地の問題を考えたり、また今度は三重に行って、神社など日本の「宗」というところを考えたりといういろんな経験を積ませている。また、スタッフ（職員）の趣味とか、特技、そういったものを生かして、例えば裁縫のゼミがあったり、畑に行き一緒に野菜を作ってみるとか、そういったゼミを 50 個ぐらい準備している。

そういったことができるのも通信制だから。そして全てのカリキュラムが、かちっと決まってるわけじゃなくていろんな選択ができるというところで通信制とはすごく素敵なシステムだと思っている。

しかし、通信制なんかに来てしまったと思い、自分の人生は終わりだというふう考える生徒も少なくない。やはり通信制の地位向上というか、通信制というのは、全日制が駄目だったから通信制じゃなくて、同じ並列なところでの選択肢としてあるんだということのを何とか一般的に認識していただきたい。それが本人の自信にもなるし、このままだとやっぱり否定的な生き方になる。なので肯定的にちゃんと生きていることを社会的にきちんと認知してほしい。

やはり通信制がたくさんできているという事態は、あんまり望ましくはないだろうと考えている。ちゃんとやっていないという言い方をすると語弊があるかもしれないが、疑問がある通信制高校があるのは聞いている。単位をお金で買えるとかいうような噂話もよく聞く。質の向上といった話もあるが、ちゃんとやってる通信制はたくさんある。そうじゃない高校があるということで足が引っ張られてしまっているということを考えていただきたい。

少子化ということで本校も経営というところで悩んでるところがある。生徒数が以前に比べると増えてきている中で、スタッフの数はほぼ変わっておらず、回っていないのが、現状。本当に皆頑張ってる場所があるところだが、そういうような状況の中で、やはり経営的に考えても今後ですね、高校がどんどん増えていくサポート校もどんどん入っていくというような状況はあまり望ましくない。

ただ、自由競争ということでその中のいい学校だけが、残っていけばいいというような考えであればそれはそれなりに頑張っていかなければいけないと思うが、やはりそれは教育としては望ましくないと思っている。そういったところをお考えいただけるとありがたい。

(丸山私学振興課長)

ただいまの御発言で教えていただきたい。「生きる力」というキーワードが偶然お二人から出たので、他のお二人からも、通信制高校に通う生徒の「生きる力」に関して行われていることあるいは何か感じられてること、所見等あれば教えていただきたい。

(出席者)

本校ではスクーリングは週2日で、月曜日から金曜日まで、子どもたちはいつでも学校に来てよく、他の曜日に登校してもお金がかからないとしている。

全日制の時代はなかなか集団に入れなかったんだけど、スクーリングでない日も行くところに仲間がいて、全く今まで作れなかったそういう人間関係ができるなど、人間関係構築が改めて何かスイッチが入ってスタートしたような感じである。

また、通常の受身の授業ではない中で、人間力の基礎を培っている。例えば夏の集中スクーリングでいろんなことを企画し、社会との関わりをなるべく持つようにしている。例えば野球の試合観戦に連れ出し、仲間の活躍に触れさせたりだとか、そういう地道な掘り起こしを通して、人間性の回復を図っている。就職希望の子の中には、アルバイト先で、自分が主体的に学んで、多分道を開いていくんだらうなというような子どもがいたり、そういう意味で個々の生徒の在り様を、好奇心だとか興味関心を引き出しながら寄り添っていくということなのかと思う。

そういう子どもたちを見ていつか社会と繋がって、自立して生きていくためには、やっぱり何かしらのやっぱり学校に足を向く、そういう知恵だとか、そういう実践をできれば先輩であるこの場の通信制の先生方の工夫をもし学べれば大変ありがたいと思っている。

本校ではスクーリングの日の授業はその担当の職員が1時間担当なんだけれども、2時間担当にしてあって、その授業の前か後に寄り添ってその子たちと対応するようにしている。そういう意味では、正直全日制で不登校に近い子どもたちと比較すると、恵まれてるというか、逆に手厚いと思う。

今後、在籍者数が増えてきたとき、人的な配置が可能なのかということと、通信制の方の補助金の率を上げてもらえてありがたいなというのが正直なところ。

(出席者)

「生きる」ということが何なのかということ自体が一つの大きな問題と思う。

その中でトピック的なことと言えば、自立・自律、立つ、律するどちらもだが。

自立(自律)ということは自分で考えて自分で判断選択して責任を持って実践していくという行動をしていくということだと考えている。その中で一番重要なのは「考える」ということだろうと思う。

批判的に物事を捉えるというようなことも伸ばすということが一番、うちの学校では考える力ですね、これを伸ばすということをメインに行っている。

そのために学校設定教科も設けている。哲学や思想というものをベースにしながら自分ではどのように考えていくかということ論述したり、総合的な探究の時間でも組み込んでいて、他にもゼミ活動においても実施するなど、みんなで話し合ったりするというような場を設けている。

そういうふうにして考える力を養っていく、その考える力というものが今生きてる、自分が生きている社会というものも批判的に捉えて、じゃあどうしたらもっと良い社会にしていくことができるんだろうか、自分の苦しみ、自分の困難さというものはどこになるのかということちゃんと自分で認識して、そこからアプローチしていく。こういう力を伸ばしていきたいというのが本音である。

(山田県民文化部長)

通信制の生徒数がすごく増えている中で、今後、教員の確保であったり、経営という観点もあるということは聞いたが、今後もっと増やしていったほうがいいのか、全日制との並立校とそうではないところで状況も違うと思うが。

それから、先ほど通信制が全日制と並び立つような存在にしたいという話があり、そのために、なるべくちゃんとやっているところが残っていくようにということだったが、もう少し他の視点でこういうことをやってもらえたらとか、そういうような考えがあったら教えてほしい。

(出席者)

生徒が増える増えないかに関しては、令和17年には1万4000人になることが見込まれている中で、公立高校はもちろん数が減っていくでしょうが、その中で通信制の数だけが維持だとか増えるだとかということとは考えられない。当然、通信制の生徒も減る。

ただ、その減り方がどうかということに関しては、これから通信制高校の数がどれだけ増えてしまうことによって各学校の生徒の減り方は変わると思う。

健全な運営経営をしていくための最低限の生徒数の確保が難しくなる可能性がある。他県だと「免許外申請」でなく、「臨時免許」が認められている。

そのあたりを県教育委員会でも検討していただければ、教員の確保ができないという問題は解決できるんじゃないかと考えている。

(出席者)

私の方は通信制の人数に関しては増えていくのではと思っている。選んでくださった子を育てたいというような思いがあるので。

先ほどからの「生きる力」についてだが、これは普通科であろうが定時制であろうが通信制であろうが、基本は「生きる」というのは一緒です。

生きる場所だとか生き方が違うかもわからないんですけど、命の重さも一緒であって、どこがいい悪いは元々ない。

また、先ほど言いそびれたが、最近、中学校から直接の入学生が増えているのは確かである。その中で高校からの転学状況だが、この地域では、普通科からの転学生が多い。実業系の学校からは基本的には来ない。全体的には普通科が多いと感じている。転学してくる生徒は、基本的には高校でやりたいことがあって、目的意識がはっきりしている。農業高校や工業高校だと望んでそこで頑張ってる、やることが高校にあるってというようなことだと思うので。

でも普通科は、進路選びで結局ここではなかったというような子どもたちがいるのではないかと思う。

(出席者)

通信制がたくさんありすぎて何が何だかわからないという声を聞く。

公私協調とかがある中で、本校だけが集めればいいとは思っていないので、通信制の今後の宣伝方法に困っている。中学校の先生、生徒、保護者はみんな同じで、全部同じ通信制として認識していて、県外であろうが、県内であろうか関係なく、どこがしっかり県内の地域に根ざした学校なのかもわからず見ていると思うと、そこら辺をきちんとわかるように県としての発信をしていただけるといいと思う。

県のHPで、中間教室とかのリンクを貼っていたりすると思うが、リンク切れになったり、リンクで飛んだら住所が違っていたりしている。そこら辺をしっかりとやっていただけるとありがたい。

(山田県民文化部長)

なかなか直ちに答えられないが、お話は伺った。情報発信のリンクが切れている話もあったが、当部のことと思われるので、きちんと確認をしたいと思う。

これから子どもも多様な学びの場であったり、そういうものをきちんと大事にしていけないといけないと思う。また、ぜひ皆さんとお話ができればと思う。

(出席者)

長野県の通信制高校は、私学振興課の皆さんがしっかり監査をやっているので、どこも悪いことはしていない。年間4日で卒業できるとか、年間4日で卒業というのは考えられない。どう考えても、特別活動10時間、スクーリング時間数NHKで6割カットしたとしても、朝6時から夜中11時まで3泊4日でやっても「えっ」て思う。その点考えると長野県の通信制はどこも皆さん、本当にしっかりやってると思う。

それだけ最後にお伝えしたい。